



会報

札幌くらぶ

2022年 5月 第97号

編集・発行/札幌くらぶ 〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1-15 札幌事務局気付
ホームページ <http://sakkyoclub.net/sakkyoclub/>

第32回札幌くらぶサロン

ファゴットの音色ってやっぱり好きだわー

何度か出演をお願いしていた夏山朋子さんに、ようやく念願かなって札幌くらぶサロンで演奏していただけた。

10年以上前、私が札幌くらぶの入会を考へて参加した絵巻終了後の懇親会で初めて近くでお見かけた楽員さんが夏山さんだった。その時、声を掛けてくれた札幌くらぶのスタッフ以外とは話しておらず、もちろん夏山さんと話をする勇気もなかった。

プログラムはテレマン「音楽の練習帳よりソナタ」からモーツァルト「アダージョ」と続いて最後にガーシュウインのミニージャカルナンバーより2曲で、ファゴットの多彩な音色が相まって時代もバロックからジャズ風まで幅広くこの楽器ならではの選曲と感じた。「冒頭がとても綺麗なメロディで、ずっと挑戦したかった曲」と本人が語った3曲目に演奏されたカリヴォダ作曲の「サロン風小品」は、ファゴットとピアノのために書かれた曲だけあって高い音からとても低い音までの音の魅力と何れも出てくる超絶技巧の聴かせどころも



あつて、演奏後にブラヴォーと叫ぶのをこらえた。一緒に素敵な演奏をしてくれた、今ひとつだこのピアニスト水口真由さんとの相性もバッチリと感じたのは言うまでもない。

アンコールの2曲はマイフェアレディより「踊り明かそう」と夏山さんのお知り合いの作曲家である西上和子さんの「ハピネス」で、ほぼ15か月ぶりのサロンコンサートが盛大な拍手の中で終演となった。

ファゴットはオーケストラの中で主役になることより低音を受け持つことがほとんどなので定期演奏会などではわずかなソロが出てきただけで強く引き付けられる。初めて体験したファゴットの演奏会はもちろん大満

足でお腹も胸もいっぱいになった。このサロンの案内チラシの夏山さんの写真は音楽写真家の木之下晃さんのサイン入りの写真でしたが、皆さまが付いていましたか？ 道理で優しい音色が聴こえてくるような素敵な写真でした。

さて前後が逆になってしまいました。第1部の八木幸三先生による札幌定期演奏会の聴きどころ。札幌くらぶサロンの柱となつているコーナーですが、いつもと同様に絶好調のじゃれが含まれた軽快なトークと札幌アーカイブス、そのおかげでお話と共に過去の名曲がすんなりと耳に入ってきてとても楽しく勉強させていただいた。プレトークの冒頭にある耳の準備運動代わりの聴き比べクイズもすっきり定着してきた。本当にいつもためになる講演に感謝。

サロンコンサートの開始前に、毎年継続している「会員の心のこもった楽譜支援金50万円」の贈呈式が行われた。

札幌くらぶサロン担当

上野文博



サロンの案内チラシに使われた音楽写真家木之下晃さん撮影の貴重な写真

6月〜9月定期 **Ensemble** シリーズ定期 名曲

演奏会を楽しく聴くために

八木 幸三 (札幌くらぶ 顧問)

第646回定期演奏会

6月25日(土) 17:00

26日(日) 13:00

指揮・ヴァイオリン

ドミトリー・

シトコヴェツキー

■ J・S・バッハ

シトコヴェツキー

ゴルトベルク変奏曲

ピアノの鬼才グレン・グールドが、この曲を録音したレコードは伝説化され、再録音されたものも大きな反響を呼び、その翌年に彼は亡くなった。「ゴルト

ベルク変奏曲」はグールドの存在なくして、広まることはなかったのではないかと。

■ チャイコフスキー

「白鳥の湖」組曲

この曲は、バッハの弟子ゴルトベルクが、仕えていた伯爵の不眠症を慰めるために演奏する曲として、バッハに作曲を依頼したもの。主題と3におよぶ変奏は、50分を要する長大な作品となった。また、変奏曲の全体設計はバッハらしく緻密に計算され、フランス風序曲の第16変奏を中央に置き、全体を2つの部分に分けながら第3、第6、第9というように3の倍数の変奏がカノンになっている。さらに同音のカノンから始まって1度ずつ音程が増え、最後の第27変奏は9度のカノンとなっている。今回、この曲を自らの弦楽合奏版で弾き振りをするシトコヴェツキーは、「グールドへのオマージュ」として編曲したと言う。

もしも、この世にチャイコフスキーの三大バレエ音楽が存在しなかったら、現在のバレエ芸術はどうなっていたらだろうか。たぶん、バレエ公演が激減するだろうことは容易に想像できる。チャイコフスキーの初期バレエ音楽である「白鳥の湖」が、初演当初は悪評で間もなく世間から忘れられ、作曲家自身も二度と決意したという事実は、この「もしも」が現実となる可能性があったと言ふことだ。悪評の原因は、それまでのバレエ音楽に対してあまりに絶対音楽的な極めて難解な作品のように感じられ、しかも振付も出演者もレベルが低かったからだろうか。



ドミトリー・シトコヴェツキー

この曲は、チャイコフスキーの死後、彼の書斎でほこりにまみれていた総譜を弟のモDESTと振付師マリウス・プティパが蘇演させ、それが大成を納めて後世のバレエ音楽における珠玉の遺産となった。

マティアス・バーメルト



©Y. Fujii

会田莉凡



©K. Miura

第10回 **Ensemble** 定期

8月4日(木) 19:00

指揮 マティアス・

バーメルト

ヴァイオリン 会田莉凡

■ 廣瀬量平

北へ

士を表現しているかのようだ。

■ ドヴォルジャーク

ヴァイオリン協奏曲

「チェロ協奏曲」が圧倒的に演奏頻度は多いのだが、この「ヴァイオリン協奏曲」もドヴォルジャークらしいロマンティックな民族音楽性が深く浸透した旋律が、全曲を通して豊かに展開される。名声が高まってきた38歳の作曲家が名ヴァイオリニスト、ヨアヒムの助言を受けながら作曲され、ヨアヒムに献呈したものの、何故か初演は別の独奏者が務めた。自由で狂詩曲風の第1楽章から、第2楽章では独奏ヴァイオリンが響きの良いオクターブ、吹きまくるようなアルペジオ、優美な装飾音の妙技を聴かせ、第3楽章ではフリアント舞曲やスラヴ的なドゥムカの様式を取り込み、民族的な華麗なロンドが展開する。

■ ブラームス

交響曲第1番

ベートーヴェンを意識しドイツ音楽の真正なる後継者をめざしたブラームスが、ベートーヴェンと同等かそれ以上の交響曲を書くために二十余年の歳月を費やして作り上げたのがこの第1番。この曲は、確かにベートーヴェン風の交響曲である。悲劇的・闘争的な短調で始まり、最後の楽章はハ長調で終わるという「暗黒から光明へ」という「運命」的構成、第1楽章の短い基本動機からの発展、第4楽章の「歓喜の歌」を想起させる旋律など理由はいくらでもある。しかし、この曲はまさにブラームスそのものの楽想なのだ。曲全体は、北ドイツ人らしい暗さと深さを最後まで持ち続け、ブラームスらしい意図的にずらされた拍とフレーズがある。この曲を43歳にして完成させたブラームスの苦

函館生まれの廣瀬量平は、戦後道立札幌第一高等学校(現札幌南高)から北海道大学予科文類に入学。この頃から作曲を始め北大卒業後、東京芸術大学作曲科に進み池内友次郎、矢代秋雄らに師事。ながらく京都市立芸術大学音楽学部で後進の育成にもあたった。邦楽器やリコーダを用いた作品が多く、さらに合唱曲も手がけている。札幌創立20周年を記念して作曲されたこの曲は、冬の荒々しい海や吹雪の雪原を想起するような厳しい管弦楽の響きが、北国の風

悩とあきらめ、さらには喜びという人生の深遠が彼自身の人間味と重なって創出される。

名曲コンサート

9月3日(土) 14:00
指揮 下野竜也

■シューベルト

交響曲「未完成」

シューベルトには6曲の「未完成交響曲」がある。彼は31年の生涯で13の交響曲を残したが、完成された作品は7曲であった。他の交響曲はスケッチ段階か、フルスコアから書き始めてすぐにやめてしまったものなどである。その中でD759番の「未完成」は、2楽章まで書かれた。作曲者が25歳で書いたこの作品は、それから43年の歳月を

■ベートーヴェン

交響曲第5番「運命」

誰でも知る名曲だが、これほど革新的で演奏が難しい曲もないのではないか。作曲家の代名詞のような「ジャ・ジャ・ジャ・ジャーン」の2小節を、動機(曲構成の最小独立単位)または主題とするか、最初の5小節を主題とするか、はたまた最初の5小節は序奏とするか意見がまだに分かれている。その解釈によつて演奏もまったく違ってくる。たった2小節、4つしかない音なのに指揮者によつて別物になってしまうような作品は他にあるだろうか。

■ドヴォルジャーク
交響曲第9番「新世界より」

「ご存じ」新世界よりは、ドヴォルジャークが音楽院長に就任するためアメリカに渡り作曲されたものだ。素朴なインディアンの民謡や黒人霊歌に強い影響を受け作曲されたが、決してアメリカそのものを描写したも

のではない。彼は新天地のアメリカに渡ったことで、あらためてボヘミアの精神と故国への郷愁が盛り込まれた新しい音楽を書こうとしたのだ。誰もが口ずさめる「新世界より」の第2楽章は、ドヴォルジャークの代名詞的旋律で後に彼の弟子が「家路」という題名で歌曲にしている。

夢見ていたシベリウスは、この楽器の扱いにも大変長けていた。優れた交響曲や交響詩を書いたシベリウスはこの曲においても交響的



三浦文彰

オッコ・カム

第647回定期演奏会
9月10日(土) 17:00
11日(日) 13:00
指揮 オッコ・カム
ヴァイオリン 三浦文彰

■シベリウス

交響詩「大洋女神」

「海の精たち」という邦題名でも呼ばれているこの作品73は、作曲家自身によつて3回改訂されている。ブルックナーのように演奏されるたびに他者からの助言を受けて改訂した訳ではなく、自らの作品に対して厳しい態度を保ち続けたシベリウスらしく、初稿は実験的に作曲し、演奏すらされていない。もと



©Kappo Kamu

もと3楽章構成の組曲として書かれていたが、イェール大学の教授を通じた依頼でノーフォーク音楽祭での初演に向けて交響詩となった。米国での演奏では、「今まで音楽として表現された海の情景で、これほど見事なものはいなかった」と言われるほど高い評価を受けている。

■シベリウス

ヴァイオリン協奏曲

若き日にヴァイオリニストを

色彩の強いものを書いたことは当然だが、独奏楽器の特性を十分に發揮させ、シベリウス以外の何者でもない獨創性溢れる作品に仕上げている。特に第1楽章では、ソナタ形式の枠を超え、カデンツァを中央において獨特の構成で情緒の底深さを幽玄に表現している。この曲は叙情的な旋律とラプソディーな曲想で、女性ヴァイオリニストに人氣があるのだが、今回は作曲者の母国フィンランドから名匠オッコ・カムの指揮で三浦文彰が北欧のロマンを奏でてくれる。

■シベリウス

レンミンカイネン組曲 (四つの伝説曲)

ら民族叙事詩「カレワラ」に親しみ、「クレルヴォ交響曲」をはじめ多くの「カレワラ」にもとづく作品を生み出した。この「カレワラ」には多くの英雄たちが登場する。その一人レンミンカイネンは、「北欧のドン・ファン」ともいうべき、好色で冒険好きな英雄で、「四つの伝説曲」は、彼の物語をもととして書かれた。第1曲はサーリの島で花嫁探しをするレンミンカイネンが描かれ、第2曲は黄泉の国トウオネラに流れる黒い河の水面に浮かぶ白鳥を描いたもので、北欧の神秘的な抒情がにじみ出た名曲として、単独でも演奏されることが多い。第3曲は主人公が求婚に失敗した悲運な結末が描かれ、第4曲は、母親によつて蘇生し帰郷する姿が描かれている。

下野竜也



©Naoya Yamaguchi

(写真協力 札幌交響楽団)

楽員さんに興味津津 ③⑩

コントラバス奏者 下川朗さんに聞く

♪ クラシックには向かない?!

出身は千葉県船橋市です。中学までは地元の学校に通いましたが、高校は隣町市川市の県立国府台(こうのだい)高校へ行きました。

初めに会った楽器はサクソです。小学校にはブラスバンド部があったので、3年生の時に入部してアルトサクソスを始めました。中学校には管

弦楽部があったのですが、サクソ以外の楽器には全く興味がなかったため、入部しませんでした。そのころからジャズサクソスを習い始めました。母の知り合いにサクソフォン奏者がいらつしやって、その方に教える受けました。小学校の時、サクソスを始めたのもこの先生に憧れてではなかったかなと思います。

ジャズサクソスを習っていた頃は、講師の先生方がバックバンドを組んでくれて、その中で演奏をしていました。Take 5やYou'd be so nice to come home etc.などを演奏していたことを覚えています。

高校では吹奏楽部に入ってサクソスを吹こうと思ったのですが、顧問の先生に「君の音はジャズだからクラシックには向かない。」と

大学は桐朋学園大学です。コントラバス専攻は同学年には自分一人でした。1年生の時には

2年生になってからようやく真

い。ジャズを習っていたのならウッドベイスに興味があるのでは?と言われ、いつの間にかコントラバスを始めることになりました。ここで



ブラスバンド演奏会



秋吉台コンクール表彰式 前列中央 会田莉凡さんと

音楽的な価値観を進化させたい



©K.Seki

プロフィール

千葉県船橋市出身。桐朋学園大学音楽学部を卒業、桐朋オーケストラ・アカデミーを修了。これまでにコントラバスを高橋洋太、西田直文の両氏に師事。文屋充徳、C. ロータル、A. チルコフ他国内外著名奏者のマスター・クラスを多数受講。2018年第7回秋吉台音楽コンクール弦楽器部門にて第1位、ならびに総合優勝である山口県知事賞を受賞。セイジ・オザワ松本フェスティバル「子どものためのオペラ」、小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトXV「カルメン」に出演。2017年度桐朋学園大学卒業演奏会、読売新聞社主催第88回新人演奏会に出演。6カ月の試用期間を経て2020年1月1日付で札幌交響楽団に正式に入団。2020年度新進演奏家育成プロジェクトオーケストラ・シリーズのオーディションに合格し、2021年2月、クーセヴィツキーのコントラバス協奏曲で札幌と共演。同年8月、第19回東京音楽コンクール弦楽器部門第3位入賞。

遊んだりしていたのが自分にとって、とても大切な経験になったと思っています。

2018年の秋吉台音楽コンクールでは、今年の4月から札幌コンサートマスターに就任された会田莉凡さんと共に同率の1位になりました。そこから時間が経ってまさか同僚になるとは思ってもいませんでした。「セイジ・オザワ松本フェスティバル」にも参加しました。小澤征爾音楽塾オーケストラは日本やアジア各国から全く違った価値観を持ったプレイヤーが集まっています。それはこれから先も経験できないものなので、とても貴重な時間でした。

♪ 第九の日 一発目に痺れた

大学を卒業して1年目に札幌からエキストラとして声をかけていただきました。それから間もなくオーディション用の録音をしました。今考えれば、あのタイミングで声をかけていただいていたければおそらく札幌に住むことなど考えもしなかったのではないかと思います。

札幌では周りの皆さんが年上の方がかりなので、とても頼りにしています。生意気な若者にも対等な立場で接してください

や合唱の入った派手なものを演奏したいですね。

そういえば、2020年の第九の演奏会の一発目で、第九の前にベートーヴェンのレオノーレ序曲を演奏したのですが、フォルテの音量が始まる曲で、その一発目の音を出した瞬間に弓が壊れてしまいました。非常に痺れました。

とても嬉しいです。コンクールなどの自分の活動にも最大限フオーワーしてください、とても助かっています。コロナ禍には早いところ終息してもらい、マーラーの交響曲2番や8番などの大編成のもの

♪ 夢は牧場主

札幌くらぶの会報を読んでいます。他の楽員さんの知らない

つた面を知ることができたり、

会員の皆様の感想を読むことができたりして、毎回とても興味深く拝見しています。札幌くらぶサロンでは、コンサートの前

に次回の定期演奏会の予習をされています。そこで語られる内容は意外にも自分が知らないものばかり

だったので、とても勉強になりました。いつも我々を支えて下

さり感謝の思いでいっぱいです。北海道の冬はやはり厳しいですね。2021年から22年にかけての大雪には本当に参りました。毎日命があることに感謝していました。

♪ リサイタルへ着実な準備を

ヴァイオリニストのイザベル・ファウストやヴィオラ奏者のアントワン・タメステイが大好きです。自分が師事しているコントラバス奏者の高橋洋太先生は永遠の憧れです。

今はリサイタルに向けて着実に準備をしているところです。来年の1月24日にキタラの小ホールで、コントラバスとピアノのデュオのリサイタルを予定しています。ドイツとチェコの

一日の練習時間はとつても少なくて、しない日の方が多いくらいです。趣味と言えるかどうかかわかりませんが、ゲーム音楽やポピュラー音楽をコントラバスアンサンブル用に編曲するのが楽しいです。

夢は牧場主です。音楽の道に進む前は、酪農とかそういう仕事をしたいなあと思っていました。今もコントラバスをささつとやめて生き物関係の仕事に就くのもいいなあと考えたりしますが、でもそこまで簡単なものではないということも分かっています。円山動物園が好きです。仕事が早めに終わった日などはその足で向かったりしています。

作曲家を中心にプログラムを組む予定です。

音楽活動としてオーケストラだけでなく、自分の明確なテーマを設けて演奏会を企画することで、音楽的な価値観を進化させられるのでは、と考えています。

担当/中居志津子

二つのクラリネット五重奏曲を聴いて

3月14日(月)「しらこ企画室内楽シリーズ3」に足を運んだ。モーツァルトとブラームスのクラリネット五重奏曲、これ以上の組み合わせがあるだろうか。

白子正樹さんが自ら筆を執ったと思われるプログラムは見開きの、シンブルでセンスのよいものであった。構成にも個性が感じられた。そこにはモーツァルトとブラームスの、この五重奏曲に対する愛がたつぷりと語られていたが、同時にそれは白子さん自身のこの2曲への愛情でもあったのだろう。

そのプログラムの中に、この2曲は「不思議な共通点とつながりを多々持つ」とあった。「不思議な共通点」とは何だろうと気にしながら演奏を聴いていたが、私にはわからなかった。それよりはむしろ両者の違いが際立つて聞こえてきた。それを言葉にしてしまうと陳腐なものになつてしまうのだが、「気品に満ちた優雅さ、たおやかさ」と「悲哀と孤独を感じさせる力強さ」とでも言おうか。第一ヴァイオリンが、モーツァルトでは岡部亜

白子さん、ブラームスでは桐原宗生さんであったこともこのような印象を与えるのに一役買っ

ていたと思われる。白子さんのクラリネットはすばらしかった。K581の冒頭、弦に誘われて弱音で入ってくるクラリネットにゾクツとした。

この繊細な入り方、そして弦に溶け込むようなフレーズの終わり方、今回はこの入口と出口に何度も身震いをした。もう一つ気付かされたのは「低音の魅力」である。これまで繰り返聴いていたはずの第3楽章のトリオにそれを強く感じた。この2曲を通じてクラリネットの音域の広さ、幅広さ、弦楽器との相性の良さを再認識した。

アンコール曲も用意されていた。モーツァルトの未完成品の「クラリネット五重奏曲」だという。存在さえ知らなかったが、K581より技巧的に難しそうな印象を受けた。

この日の白子さんは、クラリネットのキーがライトを受けて金色に輝いていたように光を放っていた。札幌の弦楽器メンバ

14人との組み合わせも気心が知れた安心感と心地よさがあつて、極上のものであった。

会員/村山英明



「札幌の武満徹」シンポジウムに寄せて

水脈の交わるところ

「札幌自体が奇跡的な暖かい音を持ったオーケストラで、僕は自分の音楽をこんなによく、愛情を持って演奏してくれるオーケストラというのは滅多にあつたことがないものですから、大変感激しています。こういうオーケストラを持っている札幌の人たちは、みなさんはじょうに誇りに思っていると思います。」1982年に札幌市民ホールで行われた世界初演曲特別演奏会での講演のなかで、武満徹はこのように述べています。

なぜ、札幌とこうした親密な関わりを持つようになったので

着いたなかにも秘めた情熱を感じさせる声です。住まい近くの多摩湖という貯水池から発掘調査のために水が抜かれた際、いつも目にしてきた湖の水の下に一本の水脈が流れていたことを見つけた感動から、海にも同様にいくつもの潮流が違うサイクルで動いている、さらにいくつもの違う動きを含んでいるのは私たちの日常や社会生活にも当てはまる、とイメーজを広げられていきます。音楽もそういった運動を持たなくてはならないし、だから音楽をシリアルなものとして捕まえるべきで、「水とそのメタファーとして、僕に大事なわけで、水に因んだ音楽と

いうものをいくつもこのところ書いているわけです」（同書20頁）と結んでいます。水をメタファーとした武満さんに倣って、その日のシンポジウムもまた武満さんの人生という水脈とパネリストの人生の水脈が交錯したところであると語られ、まるで参加した人の数だけの水脈が交わる海が出現したかのようイメージされました。偉大な作曲家の持つ大きなイメージが、豊かに人々に継承され、一体となって想像された瞬間でした。

伊藤佐紀

骨髓バンクチャリティー

「春待ちコンサート」を聴いて

『乱』のこと、文化のこと、自然のこと、札幌のこと……第一部は小沼純一さんと港千尋さんが映像や音声を交え、第二部は高山秀毅さんと上田文雄会長を加え、コーナーディネーを務めた私を含め執筆者5名が新たな「武満徹像」を照らし出そうと試みました。

ハイライトの一つは、同演奏会のCDにも収録されている武満さんの声が会場で流れたところかもしれませ

札幌首席チェロ奏者の石川祐支さんと、ピアニストの大平由美子さんによる「骨髓バンクチャリティー・春待ちコンサート」を聴いた。

演奏曲目は、エルガー「愛の挨拶」、フォーレ「シチリアーナ」、ドヴォルジャーク「母の教え給いし歌」、ラフマニノフ「ヴォカリーズ」、他、カサド「親愛なる言葉」など、チェロの珠玉の小品と、フランク「チェロ・ソナタイ長調より 第1・2楽章」、ベ

ートヴェン「魔笛」の主題による七つの変奏曲、それと大平さんのピアノ・ソロで、シュニベルト「楽興の時」より第3曲、パツハ「羊は安らかに草を食み」、メンデルスゾーン「ベネチアの船歌」、ドビュッシー「亜麻色の髪の乙女」、他、シヨパン「ノクターン 第2番 変ホ長調」などであった。どれも馴染みのある曲だが、初めて聴くような新鮮さと懐かしさを感じた。

大平さんは曲の合間に、楽曲の

背景や、原曲に歌詞が付いている曲は歌詞の大意について解説され、作曲者の思いと歌詞の大切さを改めて知った。ピアノはチェロと歌うように奏でられ、シュニベルトやパツハはドイツ語のようなアクセントを感じ、またドビュッシーやフォーレではフランス語の発音を想わせ、リート伴奏者の巧みに魅せられた。チェロもピアノの調べの上に乗って深々と歌い、声のように聴こえた。

アンコールとして演奏されたサンサーンスの「白鳥」は、アリアを歌うように奏でられ、溜め息が漏れた。春のような清々さと暖かい日差しを感じさせてくれた、忘れがたい演奏会であった。

フランクの「チェロ・ソナタ」は、ヴァイオリン・ソナタをチェロに編曲したものであるが、この曲について石川さんは、「当初はチェロのために作曲されたが、演奏できるチェリストがいなかったため、ヴァイオリンに書き換えられた」という逸話を話された。颯爽と楽器を構えるチェロの音がふんわりと放た

この演奏会は北海道骨髓バンク促進協会の主催による、チャリティーコンサートとして行われた。骨髓バンクについて、仕事で付き合いがあるので少し触れたい。骨髓・末梢血幹細胞移植は、白血病など血液疾患の根治療法で、提供者（ドナー）と患者さんのHLA（白血球の型）が適合していることが原則である。しかし合致する確率は数百から数万分の一で、この治療を受けることができる患者さんは限られている。更に近年の少子化の影響もあって、一層の支援とドナー登録が求められており、一人でも多くの命を救うためにご理解と協力をお願いしたい。



3月5日 キタラ小ホール



「札幌みらい塾」3月29日 カナモトホール

札幌市内中学生札幌定期演奏会招待事業の報告

この事業は、2011（平成23）年11月に開催した第9回札幌くらぶコンサートに札幌市職員福利厚生会からいただいた協賛金を原資にして札幌市内の中学生や留学生を札幌の演奏会に招待したことが契機となっています。福利厚生会からは翌2012年度以降も引き続き協賛をいただき、札幌市内中学校の吹奏楽部に所属する生徒を中心に札幌の定期演奏会に招待することが可能になっております。小学6年生を招待した「ファーストコンサート」に続く「セカンドコンサート」として位置づけられており、今年（2021年）度で10年目を迎えました。

中学生招待事業担当の活動について

2019年にこの事業担当を引き継いでから状況が目まぐるしく変化してきました。

2020年度はコロナ禍のため招待公演を新定期も含めた特別措置となり、キタラの改造工事による休館もあってヒタル劇場での招待も行いました。

ヒタルでは1階の車寄せで出迎え、一般利用する人々を避け間隔を空けながら4階ホール入

2020年3月以降新型コロナウイルス感染症の影響で、定期演奏会自体が中止になるなど招待が例年通り実現出来ず、同年10月からやっと再開できるようになりました。度重なる蔓延防止措置により中学校のクラブ活動は自粛を余儀なくされ、2020年・2021年度も申込後キャンセルが相次ぐ事態は続き、現状も2019年度以前の年間500名を招待するという目標には遠く及びません。通算結果として、2021年度末で招待した中学校の数、生徒・引率先生の総人数は、127校4056名となりました。

り口までエスカレーター乗換利用で誘導し、チケットを渡した後記帳・検温・消毒し入場。更に4階席（9階）着席までが長い道のりとなり、分散退場時も最後となるため、感染防止に気を付けながら中学校側・誘導側とも大変で気遣いが必要となるホールでした。

2021年3月のヒタル公演を最後に、送迎をお願いしてい

10年間で招待した生徒数と学校数

年度	生徒数	学校数
2012	464	(15)
2013	437	(14)
2014	436	(14)
2015	536	(17)
2016	543	(16)
2017	538	(14)
2018	454	(15)
2019	335	(10)
2020	167	(6)
2021	146	(6)
合計	4056人	127校

たバス会社もコロナ禍の影響で廃業となつてしまい、新たなバス会社（現在はダイコク観光バス株式会社）を探し招待継続準備出来たものの、4〜6月定期招待8校全てキャンセル。やっと招待出来たのは2021年7月の1校で、その後も7校キャンセルで2021年度は計6校のみの146名に留まっていました。

実際はキャンセルや公演中止となつた演奏会の招待手配は全て毎回準備完了（チケットとバス手配と招待校への案内）しており、依頼の撤回に追われ招待できなかった悔しさと申し訳ない気持ちが入り交じり、徒勞に終わる虚しさを引きずつたまま招待学生が居ない札幌の演奏会を聴く事になりました。コロナ禍による三密回避による目立つ空席と相まって心から楽しめる自分がいまいました。

現在はキタラホール公演に戻

り、定期演奏会8回は土曜・日曜開催分の計16回分が招待対象となっています。

僕の愛聴盤①

「精妙さと立ち昇る官能美」―楽劇「ばらの騎士」―

我々音楽ファンにとって、生演奏に触れるのはこの上ない喜びであります。CDなどを通じて様々な演奏を聴くこともまた楽しいことです。そこで、今号から数回連続で「僕の愛聴盤」と題して、会員の村岡範男さんに「お薦め」の名盤を紹介していただくことにしました。

せいぜいカラオケでドラ声

張り上げるくらいで、正規の音楽教育とは無縁だった僕ではあるが、クラシック音楽を聴くことには人一倍情熱を傾けてきたつもりである。僭越ながら、60年以上におよぶディスクとの付き合いから耳を傾ける頻度の高い愛聴盤を以下順不同でここに紹介したい。会員諸氏が関心を抱いてくださるのならば、この上ない喜びである。

現在キタラホール公演に戻

2022年度札幌定期演奏会は4月より始まりましたが、例年2月頃助成金申請するところ招待依頼が出揃わず、4月初めによく申請、中旬に交付となりました。さっそく4月は2校46名の招待を実施出来、多くの中学生が札幌の素晴らしい演奏を体感出来る機会が増えればと願っています。

中学生招待事業担当

深井雅昭

楽劇「ばらの騎士」(R・シユトフウスヘルベルト・フォン・カラヤン指揮/ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団他)
(82年・84年録音)

「魔笛」以来、ドイツ・オペラ最高峰の作品を最も高い次元で結晶させた稀有の名演といえるだろう。このオペラについては、昔から評論家諸氏はエリザベ

ト・シユヴァルツコップが元帥夫人(マルシャリン)を歌った、この指揮者の旧盤(56年録音)を推しているものの、総合力では新盤がはるかに上。

甘美なけだるさであたりを染めるウィーン・フィルのバックに加え、アンナ・トモワ・シントウ以下カラヤン選りすぐりの歌手たちが完成度の高いアンサンブルを披露している。贅沢なサウンドの背後から忍びよる若い影が限りなく切ないのと同時に、官能の谷間を漂う浮遊感に身も心もとろけそうになる。「イガロの結婚」の延長戦上に位置するこのオペラ、第3幕大詰めの三重唱と二重唱はあらゆるジャンルの音楽を超える最も美しい瞬間であろう。

奇跡ともいえる精妙さと、品位を損なうことのない色気を出したカラヤン美学の到達点に拍手喝采である。これほど雄弁な音楽表現を僕は知らない。アンサンブル・オペラの神髄ここにあり。

このディスクを手にしてからどれだけ、興奮と癒しの時を経験しただろうか。しかもそれへの親密度は、僕が年齢を重ねるにしたがって濃さを増しているのだ。

会員/村岡範男

どれに乗ろうか 選択に迷う！

私は、街に出るとき行きは市電又はバス、若しくは市電と地下鉄の乗り継ぎという選択肢があり、バス停や市電停車場までの距離は似たり寄ったりで、あとすれば座れるかという選択肢が最優先されてあまり迷うことがありませんが、帰りとなるとバス又は市電と地下鉄から市電への乗り継ぎが2方向あり、便がすぐあるか、そして座れるか、などの選択肢があり迷うことが多くなります。

先日のカナモトホールでの講演会での帰り、バス停は大通西1丁目までホールから徒歩2分、しかし時刻は夜9時近く便数が1時間に2、3便あればよい方で少ないはず、一方市電は西4丁目まで徒歩10分弱だが便数はある程度ある、地下鉄は地下街を歩いて5分程で便数も多い、

がしており、次の便までは15分以上待ち、これでバスを諦め市電に選択を切り替え、地下に潜ると出るときに階段を上るのがしんどいなということ、地下に潜らず地上の街中を歩いて西4丁目電停に向かうこととしました。

随想 本棚の隅から

25

今年はお体に過酷な冬だった。大雪の日々を胃腸科の病院に閉じ込められた。義理の姪が「今度はきつたはったじゃないのね」と言う。

私のとつた行動は、まずバス停に行ってみる、そして時刻表を確認する(時刻表はスマホでも検索ができるがめんどくさい)、で、直近に便があればバスに乗るでしたが、直前に乗り逃

今年はお体に過酷な冬だった。大雪の日々を胃腸科の病院に閉じ込められた。義理の姪が「今度はきつたはったじゃないのね」と言う。

静謐というか孤高と言ったらいいのか福井在住の画家「前壽



「独絃哀歌」
ヴァイオリン ヤンネ館野

のかトラックをはじめとする工事車両が30台くらい路上駐車しており、一部は歩道を塞いでいる車両もあり歩きにくかったけれど無事西4丁目電停に着、すでに電車が止まっていて並んでいた乗客もほとんど乗ってしまっただけだったので、立っている人もかなりいて座れそうもない状況となっていたので、この電車を見送り次の便を待つことにして並んでいると、まもなく次の電車が到着、無事座ることもできて9時半過ぎには帰宅することができました。

今年はお体に過酷な冬だった。大雪の日々を胃腸科の病院に閉じ込められた。義理の姪が「今度はきつたはったじゃないのね」と言う。

色々のことを考え、選択して行動するために頭を使うことはありませんか。外出機会が少なくなった今、移動時間が読めず、つい早めに出て開演や待ち合わせ時間よりかなり早く着いてしまう、特に初めてのところとなるとこういうことが起きやすい。そして、時間つぶしの方法、場所の選択と迷うことがこれからも増えて頭を使うことが多くなりそうで、なかなかボケられそうもありません。

会員/武藤義典

「札響くらぶ」へのお問い合わせは下記へ

- 「札響くらぶ」へのご質問やご要望、住所の変更、入会、退会については「札響くらぶ事務局」宛に下記の方法で連絡をお願いいたします。
 - (1) 郵 送: 〒064-0931 札幌市中央区中島公園1-15 札響事務局気付
 - (2) メール: infomation@sakkyoclub.net
 - (3) FAX: 011-272-8552
 - (4) お問い合わせフォーム: HP お問い合わせページなどからリンク
- ※住所・氏名・会員番号・電話番号等の連絡先を明記してください。

スタッフの声

▼今冬の雪は例年に比べ多すぎるくらい多くて、雪捨て場に苦労しました。雪かきで肩を痛めて、未だ回復していません、会員の皆さんも大変だったことと思います。来年は雪が少なく、札響定期にも楽に通えることを願っています。(佐々木)

▼私のクラシック音楽への関心は音楽から作曲家へ、そして時代背景等、最後には演奏者へと広がってきた。そんな私には札響くらぶサロンのミニコンサート後の楽団員との歓談は、貴重な時間だ。その上、八木顧問の軽妙洒落な話も楽しく、毎回楽しみにしている。(寒河江)

▼フィギュアスケート競技の楽しみに選曲がある。演技構成点を左右する大事な要素なのだ。記憶に新しいのは、マルチエツロのオーボエ協奏曲第2楽章。氷のリンクを突き抜けていく旋律に思わず聴き入った。臨んだ選手は日本の男子。高い技術と表現力で、見事に高得点を得たの言うまでもない。(島田)

会員/井上明子

- エイナル・エンゲルンド 独奏ヴァイオリンのための
- ハチャトリアン アラム・イリイチ
- 独奏ヴァイオリンのための
- ハチャトリアン
- 独奏ヴァイオリンのための
- ペール・ヘンリク
- ノルドグレン
- ヴァイオリン独奏のための
- ソナタ 作品104
- ヨハン・セバスティアン・バッハ
- 無伴奏ヴァイオリンのための
- パルティータ第2番二短調
- BWV1004

胸が締め付けられるようなヴァイオリンの調べは冬ごもりのさみしい心に深く沁み、いつの間にか頬が濡れていた。早く吹く風に春の匂いがする。早春の空を眺めながら、甘美な孤独に浸る。ふと、飯村真理さんの最初のリサイタルを思い出した(無伴奏ヴァイオリンの三〇〇年間) 2020年8月26日) 彼女だったらどんなCDを創るだろう、と夢想にふける。